

## No 17 特別な教育的ニーズのある子について保護者にどう伝えたらよいか

集団にうまくなじめない等の子どもがいる学級の保護者から、「乱暴でまわりの子が迷惑しています。」「うちの子が落ち着かなくなりました。」など、苦情が寄せられることがよくあります。

まず、担任と支援チーム・指導助手などにより、協力体制・共通理解のもとに一人一人が安心して学習に取り組める学級づくりに努めることが第一ですが、さらにその上で、様々な機会を見つけて当該児童の行動について周囲の保護者に理解を図る継続的な取り組みが大切です。

- 1 まわりの子どもたちの思い(訴え)も受け止めながら、共に成長できるよう双方を指導していることを保護者に伝える。

まわりの子の困惑さも十分共感してあげる。どうしたらうまくいくかを一緒に考える。  
保護者には、周囲の理解が何よりも良い状況をもたらすことを分かってもらう。

「どの子どもとても大切に考えているんだよ。」というメッセージが伝わるような働きかけをすることが大切です。「ずるい」「えこひいきだ」などの声も、もっと自分たちにも目を向けてほしいというサインです。まずは周囲の子の思いを受け止めてから、まわりはどんな働きかけをしたらよいかを教えていくようにします。例えば、「ちゃんはそんなことしたけど、本当は仲良くしたくてやったんだよ」など。そういった共に成長しようとする子ども達の姿も十分に認めていくようにしたいものです。

「あの子がいるために」というようなレッテルを貼ることは、人権への差別につながるものです。集団の中でうまくいかない子は、その子自身も苦しんでいることを理解してもらい、トラブル時にこそ指導のチャンスとして「誰もが居場所のある学級づくり」を目指していることを分かってもらいます。

- 2 学校の教育や学級経営の方針をきちんと説明し、理解啓発を進めていく。

全校や学年ごとの保護者会、PTAの会合などを利用して、問題があつてからではなく、日頃から理解啓発を図っておく。  
学校の実情に応じた取り組み(少人数指導や指導助手の活用など)をよく説明する。

担任一人ですることには限りがあります。日頃から学級の状況を学年や学校体制で把握しながら、当該児も周囲の児童生徒も、様々な先生方から暖かい声かけをしてもらっていること、障害の有無にかかわらず「みんな違っていい」「どの子ども他の人と違ったよさをもっている。よく在りたいという願いをもって頑張っている」といった考え方で一人一人を生かす教育を進めていることなどを、保護者会や会合の折に学年主任や学校長から説明してもらうとよいかもしれません。

学校によっては、少人数指導教員やコーディネーター、指導助手など、校内の資源を最大限に生かした独自の特別支援体制を生み出しているところもあります。担任だけで特別なニーズのある子を見るのではなく、校内の全教職員でみていくことを具体的に説明していくことも重要です。

## &lt;指導のポイント&gt;

多動な子が多い学級を受け持っていたA先生が、いつも心がけていたことを紹介します。

- ・ 集団生活の最低ルールを毎朝子ども達と共に確認していた。
- ・ 一人一人との個人面談を続けていた。
- ・ 「自分たちの学級」「自分たちの先生」という意識をもたせた。
- ・ 大切なことは、必ず書くようにし視覚的に訴える工夫をしていた。
- ・ 「対人関係ゲーム」等の活用により仲間づくりをすすめていた。

